

NEW JAPAN  
*P*HILHARMONIC  
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団  
2023/2024シーズン



2023

4

April



©Takashi Iijima

## 佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。1987年アメリカのタンフルウッド音楽祭に参加。その後、故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。89年新進指揮者の登竜門として権威あるブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。95年レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクールで優勝し、「レナード・バーンスタイン桂冠指揮者」の称号を授与される。

これまでパリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、ケルンWDR交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団等欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねている。またエクサンプロヴァンス音楽祭の『椿姫』（パリ管弦楽団）、オランジュ音楽祭のプッチーニ『蝶々夫人』（スイス・ロマン管弦楽団）、トリノ王立歌劇場では『ピーター・グライムズ』、『カルメン』、『フィガロの結婚』等海外でのオペラ公演も多数指揮。

現在はオーストリアで110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督を務め欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、サントリー「1万人の第九」総監督などを務めている。

CDリリースは多数あり、『チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番（BBCフィルハーモニック/ピアノ辻井伸行）』、『佐渡裕ベルリン・フィル・デビューLIVE』、『ベートーヴェン「運命」、シューベルト「未完成」』（ベルリン・ドイツ交響楽団）などの海外楽団とのCD、『プラスの祭典』シリーズ（シエナ・ウインド・オーケストラ）などが好評を得ている。最新盤はシエナ・ウインド・オーケストラを指揮した『バーンズ：交響曲第3番』を2022年6月にエイベックス・クラシックスよりリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP新書）、絵本『はじめてのオーケストラ』（小学館）等がある。

2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。

オフィシャルファンサイト：<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>



## 辻井伸行 [ピアノ] Nobuyuki Tsujii, Piano

2009年6月に米国で行われた第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールで日本人として初優勝して以来、国際的に活躍している。11年はカーネギーホールで招聘でリサイタル、12年はアシュケナージの指揮でロンドン・デビュー、ゲルギエフの指揮でサンクトペテルブルクにデビュー。13年にはイギリス最大の音楽祭「BBCプロムス」に出演し「歴史的的成功」と称賛された。同年ルーヴル美術館でのリサイタルは世界ヘイインターネット中継された。15年には佐渡裕指揮でウィーン・デビュー、ゲルギエフ指揮ミュンヘン・フィルとドイツ及び日本で共演。16年はM. ザンデルリンク指揮ドレスデン・フィルとヨーロッパツアーでのリサイタル・デビュー。17年はアシュケナージ指揮でベルリン・ドイツ響にデビュー、ユロフスキ指揮ロンドン・フィルと日本ツアー、パリのシャンゼリゼ劇場でのリサイタルが絶賛され、18年はゲルギエフやアシュケナージとの共演など世界的アーティストとの共演を数多く行った。19年はカーネギーホール主催のピアノ・リサイタル・シリーズへ出演し驚異的な成功を収めた。コロナ禍においても、いち早くオンラインでのコンサートを開催し大きな注目を集めたほか、YouTubeでの公式チャンネルを開設しクラシック界に新たなムーブメントを起こし、チケットがもっとも入手困難なピアニストと評されている。2021年11月には感染が比較的落ち着いたミラノとパリでコンサートを開催し、満員の聴衆からスタンディングオベーションを受ける大成功を収めた。

2009年、文化庁長官表彰(国際芸術部門)。10年、第11回ホテルオークラ音楽賞及び第1回岩谷時子賞受賞。13年、第39回日本シヨパン協会賞受賞。

オフィシャル・サイト <https://avex.jp/tsujii/>

2023/2024 シーズン  
新日本フィルハーモニー交響楽団 4月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #648 相場ひろ	5
すみだクラシックへの扉 #14 小室敬幸	9
楽員ストーリーズ ③③ 崔 文洙 (ソロ・コンサートマスター)	15
NJP from Inside	16
NJP 5月、6月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	19
2023 / 2024シーズン 定期演奏会プログラム	20
室内楽シリーズ	27
「パトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



〈ご来場のお客様へのお願い〉

Triphony Hall Series  
Suntory Hall Series  
2023-2024 Season  
#648

4.8 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
トリフォニーホール・シリーズ 第648回定期演奏会  
2023年4月8日(土) 14時00分  
すみだトリフォニーホール

4.10 [月]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
サントリーホール・シリーズ 第648回定期演奏会  
2023年4月10日(月) 19時00分  
サントリーホール

●ラフマニノフ (1873-1943)

ピアノ協奏曲第2番 八短調 op.18 \*

約35分

Sergei Rachmaninoff: Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18 \*

I. Moderato

II. Adagio sostenuto

III. Allegro scherzando

—— 休憩20分 ——

●R. シュトラウス (1864-1949)

アルプス交響曲 op. 64, TrV 233

約60分

Richard Strauss: Eine Alpensinfonie, op. 64, TrV 233

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[ピアノ] 辻井伸行 \*

Nobuyuki Tsujii, Piano \*

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [4/8公演]

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

18世紀、ジャン=ジャック・ルソーの「自然に帰れ」というモットーが示すごとく、「人間を本来の姿に帰すための装置」としての自然に人々の関心が向かっていった。その言葉に心動かされた都会人たちが、まず目を向けたのは農村であった。季節のリズムに従って農作物が収穫され、乳製品を牛や羊が毎日生み出し、牧人は笛を吹いて娘たちと戯れる。そののどやかな世界こそ人間が騒がしい文明を捨てて追求すべきではないか。そうした思想が流行した様子は、例えばルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの有名な「田園交響曲」にも窺うことができる。しかし、田舎の農村に実際に足を向けた都会人たちは、そこに理想の「自然」を見出すことができなかつた。田園地帯は農民たちによって人工的に管理されているし、なにより実際の農村には日々のきつい労働がついてまわる。人々の憧れを満たすには、田園地帯はあまりに人が多く、生活の匂いにまみれていた。もっと清浄で、人気ない世界を求めた人々は、次の目的地を山に求める。人も動物も滅多に足を踏み入れない、手つかずの自然が残されている高山こそは、彼らの要求を満たす格好の場所だ。山に登ることそのものを目的とする近代的な登山は、こうして始まった。

18世紀から受け継がれた自然像や田園像を表明し、偉大な自然と一体となって生きる農民たちの姿に、人間の生の理想を見出したベートーヴェンの「田園交響曲」に対するひとつの回答が、リヒャルト・シュトラウスの「アルプス交響曲」であるとみなすことができる。ここでは、道行きの主人公である登山者は人里を離れて滝や氷河、山頂からの眺めに魂の浄化を託す。後者がより人間味薄く、いわば外面的に感じられるのは、登山者が人との交わりを断ち、孤独に生きようとするからだ。その意味ではベートーヴェンよりもリヒャルト・シュトラウスの方が求道的なのかもしれない。

### ■ ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 op. 18

低迷期の模索を経て▶

セルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)は1897年に自らの交響曲第1番ニ短調 op. 13の初演が失敗に終わって以降、精神的に不安定な状態にあった。指揮者として舞台に立つことはあっても、協奏曲のソリストを務めることはなく、また創作活動もはかどらなかつた。1899年にはロンドン・フィルハーモニック協会の招きで初めて渡英するものの、演

奏会では自作の管弦楽曲を指揮し、室内楽のコンサートに参加したのみで、聴衆が求めていた華々しいピアノ演奏をかの地で披露するには至らなかつた。このときにプログラムに載せるはずであった新作のピアノ協奏曲はまだ形を成しておらず、彼が作曲に取り組んだのは翌年の夏以降のことである。

自信を回復させた▶  
初演の成功

1900年前半に彼は抑鬱状態を脱するために催眠療法を受けた。これが功を奏したのか、この年後半になると、彼は旺盛な創作欲にかられるようになる。沸き上がる楽想はピアノ協奏曲1曲分をはるかに超えたため、彼はピアノ協奏曲と並行して2台のピアノのための組曲第2番op. 17の作曲にもとりかかる。ピアノ協奏曲の方は同年12月には第2、3楽章が完成し、モスクワにて従兄のアレクサンドル・ジロティの指揮、自らの独奏によってモスクワで初演される。この演奏が大成功に終わったことでラフマニノフはさらなる創作欲の高まりを得、翌年11月9日、やはりモスクワで、ジロティの指揮、自らのピアノによって全曲の初演が行われた。この演奏会が熱狂的な喝采を浴びたことで、ラフマニノフは作曲家としての自信を回復し、さらなる高みに向かう第一歩を踏み出したのだった。

曲の構成と▶  
音楽の特徴

**第1楽章** モデラート。教会の鐘の音を模したピアノのゆっくりした連打で始まる冒頭が印象的である。弦楽器による濃厚な情緒をたたえた第1主題とピアノの歌う穏やかで抒情的な第2主題に基づく自由なソナタ形式による。ピアノは派手派手しく前面に出るよりも管弦楽に対するオブリガートにまわる事が多く、独奏と管弦楽の間に強い一体感を感じさせる。

**第2楽章** アダージョ・ソステヌート。3部形式により、管弦楽とピアノの間で抒情的な旋律が歌い交わされる。中間部はピアノを主体に次第に高揚し、その果てにあらわれる快速なエピソードはスケルツォ楽章の代わりと解釈することもできる。短いカデンツァを経て第1部が帰し、穏やかに幕を閉じる。

**第3楽章** アレグロ・スケルツァンド。ソナタ形式により、ヴィオラで提示される第2主題は特に有名である。ふたつの主題がひとつになって歌い上げられるクライマックスはとりわけ印象深い。

[楽器編成] ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部。

■ R. シュトラウス：アルプス交響曲 op. 64 TrV 233

最後の管弦楽大作 ▶

リヒャルト・シュトラウス(1864~1949)は若くして「英雄の生涯」や「ドン・ファン」などの大作交響詩を次々に発表したが、20世紀を迎えて以降は活動の中心を歌劇場に移していた。彼にとって最後の大規模管弦楽作品となるのが「アルプス交響曲」で、1911年ごろより1915年にかけて作曲され、1915年10月28日、ベルリンで初演された。

登山の哲学と  
ニーチェ

アルプス山脈を望むミュンヘンに生まれ育ったシュトラウスは、少年時代にいくどか近隣の山に登っており、そうした経験が着想のもととなったと思われる。また登山という行動を通じての、自己の力のみによる道徳的純化、自らの働きによる自己の解放、自然への崇敬といったテーマが哲学者フリードリヒ・ニーチェ(1844~1900)の思想に共通するとして、シュトラウスは最初タイトルにニーチェの著書名を加えて「アンチクリスト：アルプス交響曲」とする予定であったが、最終的に現在のタイトルに落ち着いた。

山の日を描いた  
22の場面

曲は登山と下山の様子を描く。以下、楽譜に書き込まれた22のタイトルを「」で示しつつ、その道行きを概説する。「夜」の暗がりをおぼせる序奏に始まり、やがて「日の出」を迎えると「山登り」が始まる。幻想的な広がりをおぼせる「森の入り口」に入り、「小川に沿って歩く」と、威勢よく水のほとばしる「滝」に出会う。水しぶきの向こうには山頂の「幻影」がちらつく。「花咲く草原」を抜け、カウベルの響きが鳴り渡る「牧場」を過ぎ、「茂みとやぶを抜けると道に迷って」しまうが、いきなり「氷河」を眼前に臨む道に出る。足許のおぼつかない「危険な瞬間」を経験して後、ようやく「山頂」に至る。(荘厳な金管楽器の響きはニーチェの著作を題材とした「ツァラトゥストラはかく語りき」の序奏と好対照を成す。)「ヴィジョン」のエピソードが山からの眺望をひとわたり描き出すと、「霧が立ちのぼり」、「太陽がかすんでいく」。名残惜しげな「エレジー」を歌いながら下山を開始するが、「嵐の前の静けさ」は遠雷に脅かされ、やがて雨風が近づいてくる。ウィンドマシーンが激しい風を描写し、「雷と嵐の中、下山」を急ぐ。ここでは登山中の光景が逆順にあらわれることで下山が描かれる。山を下りると既に「日没」の時間であり、翳々たる「余韻」を残しつつ、やがてあたりは「夜」の闇に沈んでいく。

[楽器編成] フルート4(ピッコロ2持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、ヘッケルフォーン、Es管クラリネット、クラリネット2、C管クラリネット(バスクラリネット持替)、ファゴット4(コントラファゴット持替)、ホルン8(ワーグナーチューバ4持替)、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、[バンド]：ホルン12、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ2、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、カウベル、ウィンドマシーン、サンダーマシーン、グロックンシュピール、ハーブ2、チェレスタ、オルガン、弦楽5部。

● レスピーギ (1879-1936)

リュートのための古風な舞曲とアリア 第3組曲 P. 172

約15分

Ottorino Respighi: Antiche danze ed arie per liuto, Suite No. 3, P. 172

- I. イタリアーナ Italiana: Andantino
- II. 宮廷のアリア Arie di corte: Andante cantabile
- III. シチリアーナ Siciliana: Andantino
- IV. パッサカリャ Passacaglia: Maestoso

● ラフマニノフ (1873-1943)

パガニーニの主題による狂詩曲 op. 43 \*

約25分

Sergei Rachmaninoff: Rhapsody on a Theme of Paganini, op. 43 \*

—— 休憩20分 ——

● ドヴォルジャーク (1841-1904)

交響曲第9番 小短調 op. 95「新世界より」

約45分

Antonín Dvořák: Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

- I. Adagio – Allegro molto
- II. Largo
- III. Scherzo: Molto vivace
- IV. Allegro con fuoco

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[ピアノ] 辻井伸行 \*

Nobuyuki Tsujii, Piano \*

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙/伝田正秀

Munsu Choi & Masahide Denda, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

「<sup>よる</sup>故きを<sup>たず</sup>温ね、新しきを知る」——温故知新という四字熟語の由来は、孔子（前552頃～前479）の弟子たちが著したとされる「論語」に由来するのだが、実はこの言葉には続きがある。「<sup>もつ</sup>以て<sup>たす</sup>師と<sup>なす</sup>為る可し」——つまり温故知新を実践できた人こそが、師（先生、リーダー）になりうるのだと孔子は語ったのだという。これは音楽においてもあてはまる。広大な選択肢のなかから対峙する過去を選び、その時に必要とされる新たな可能性を引き出した人たちこそが、後に続く作曲家たちのロールモデルになったのだ。いわゆる「天才」作曲家たちだけで、傑作は生まれ得ないのである。

### ■ レスピーギ：リュートのための古風な舞曲とアリア 第3組曲 P.172

イタリアのボローニャに生まれたオットリーノ・レスピーギ(1879～1936)は1913年、サンタ・チェチーリア国立アカデミアの教授に就任。移住先のローマの歴史と文化に触れるなかで、「ローマ三部作」の1作目となる交響詩「ローマの噴水」を1916年に生み出した。

そして翌年には、アカデミアの図書館でみつけた古いイタリアの音楽を編曲した「リュートのための古風な舞曲とアリア」が初めて作曲されている。最初の第1組曲(2管編成の管弦楽)で取り上げられたのはルネサンス時代のリュートのための音楽だけだったが、1923年の第2組曲(3管編成の管弦楽)と、本日演奏される1931年の第3組曲(弦楽)にはバロック時代のリュート以外の音楽も含まれている。ちなみにレスピーギが古い音楽に興味を持つようになったのは、師のひとりルイジ・トルキ(1858～1920)からの影響だった。

**第1曲**は作者不詳の16世紀の音楽をもとにした「イタリアーナ」。典雅な旋律が繰り返され、終盤では異なるハーモニーで色合いを変える。

**第2曲**はジャン＝バティスト・ブザール(1567頃～1617以降)のリュート曲に基づく「宮廷のアリア」。中間部の明るい響きがコントラストを生み出す。

**第3曲**も作者不詳の16世紀の音楽がもととなった「シチリアーナ」。この舞曲特有の付点のリズムが哀愁を漂わせる。

**第4曲**はルドヴィコ・ロンカッリ(生没年不明)が1692年に出版した「スペイン・ギターのための綺想曲」に収録された同名曲をもとにした「パッサカリア」(和音に基づく変奏を伴う舞曲)だ。

[楽器編成]弦楽5部。

### ■ ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲 op. 43

五人組からの影響 ▶ セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)が作曲を師事していたのは、ロシア五人組リムスキー＝コルサコフ門下のアントン・アレンスキー(1861～1906)である。交響曲第1番などの初期作では五人組を想起させる民族色に由来するモダンなサウンドが表出していた。だが交響曲第1番の初演が大失敗してスランプになり、そこから脱したピアノ協奏曲第2番以降の作品では民族色が薄められたため、ラフマニノフといえばチャイコフスキーの後継者というイメージが先行してきたのだ。

モダニズム追求の一作 ▶ 練習曲集「音の絵」op. 39(1916～17)あたりから明らかに、モダンなサウンドが再び顔をだすが、ロシア亡命によって創作そのものが停滞。1926年完成のピアノ協奏曲第4番から最後の作品となった1940年の交響的舞曲まで、作品番号のつけられた作品でいえば僅か6作品でラフマニノフは独自のモダニズム(現代的感覚による表現)を追求した。1934年に書かれた本作でラフマニノフは故きを温ねて、これまで多くの作曲家が繰り返して変奏曲を書いてきた主題から、新鮮な音楽を生み出した。

曲の構成と音楽の特徴 ▶ 単一章章だが、構造としては3つの部分に分かれている。【第1部】は短い序奏のあと、主題の前に[第1変奏]として旋律の輪郭だけが奏でられる。改めてニコロ・パガニーニ「24のカプリス」より第24番からとられた[主題]を管弦楽が提示。それをピアノが受け継ぐと[第2変奏]へと入り、次々と変奏が繰り返されていく。[第7変奏]と[第10変奏]ではピアノがグレゴリオ聖歌の「怒りの日」を重ねていくことにも注目しておこう。

【第2部】は静かな弦楽器のトレモロから始まる。最初の[第11変奏]は二短調/3拍子へと移り変わる移行部で、[第12変奏]のゆったりとしたメヌエットを経て、[第13変奏]からはテンポアップしていくが、実は随所に「怒りの日」をほのめかす音の動きが混ぜ合わされている。[第16変奏]で再び静かで暗い雰囲気となるが、[第18変奏]ではパガニーニの主題を上下逆さまにして生み出された叙情的な旋律がクライマックスを築く。

【第3部】はピアノが早急なパッセージを弾き始める[第19変奏]から始まり、[第22変奏]からは再び「怒りの日」がはっきりと顔を出す。再現部の役割も担う[第23変奏]で改めてピアノが主題を奏した後、最後の[第24変奏]で幕を閉じる。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部。

ローマの歴史と文化から ▶

作曲の経緯 ▶

4曲の構成と音楽の特徴 ▶

## ■ ドヴォルジャーク：交響曲第9番 ホ短調 op. 95「新世界より」

▶ スメタナ、  
ブラームスの存在

アントニン・ドヴォルジャーク(1841~1904)が作曲家としてロールモデルにしたのは同郷の先輩、ベドジフ・スメタナ(1824~84)であろう。彼がチェコ語の歌劇『売られた花嫁』で成功を取めたように、ドヴォルジャークもまたオペラ作曲家を志した。その過程でリヒャルト・ワーグナー(1813~83)から影響を受けるようになっていたのだが、ドヴォルジャークを成功に導いたのはワーグナーと対立していたヨハネス・ブラームス(1833~97)だ。彼に認められた頃から、スラヴ風の器楽曲に力を注ぎ、交響曲や室内楽にスラヴ風の楽章を挿入したことが個性として認められていった。

▶ 新天地での出会いから

1892年、ニューヨークのナショナル音楽院の院長に就任するため、アメリカに移住したドヴォルジャークは、雇い主であるサーバー夫人からアメリカにまつわる作品を書くよう薦められる。この新天地で出会ったネイティブ・アメリカンの文化や、アフリカ系アメリカ人のキリスト教音楽である黒人霊歌などを取り入れて1893年に書かれたのが本作だ。

▶ 4楽章の構成と  
音楽の特徴

**第1楽章** 序奏付きのソナタ形式。序奏に登場した低弦の旋律が、ホルンに受け継がれると第1主題に(この旋律は他の楽章にも姿を変えて顔を出す)。他にも沢山のメロディが連なっていくが、旋律同士を似通わせたり、共通する要素をもたせたりすることで統一感を生み出している。

**第2楽章** 三部形式。金管楽器のコラールのあと、誰もが故郷や幼少時代を思い出さずにはいられない有名な旋律が歌われていく。物悲しい中間部はネイティブ・アメリカンの男性が、愛する妻を埋葬する場面を描いた音楽とされる。

**第3楽章** 三部形式。ネイティブ・アメリカンの踊りをイメージしたスケルツォ。

**第4楽章** 自由なソナタ形式。フィナーレに相応しい緊張感の高い音楽として始まる。しかし徐々に落ち着いていくと、第1~3楽章に登場したフレーズも現れて変容。異なる性格を与えられて統合されてゆく。

[楽器編成]フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、弦楽5部。



ほほえみがふえていく、  
未来がいいね。

オリックスグループは、  
サステナブルな社会をめざして、  
環境保全や、未来を担う子どもたちへの支援など、  
社会貢献活動に取り組んでいます。



オリックス